授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2846 号

Surveillance Strategy after Curative Resection for Oesophageal Squamous Cell Cancer Using the Hazard Function

ハザードファンクション法を用いた食道扁平上皮癌根治切除後のサーベイランス戦略

兼松 恭平（かねまつ きょうへい）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、ハザードファンクション法という統計手法を用いて食道癌根治術後の再発リスクを経時的に解析し、Stage 毎にフォローアップ頻度を規定すべきであることを提唱している。
【新規性、創造性】これまで食道癌術後のフォローアップに関しては、エビデンスが無く施設ごとに慣習的に行われてきた。
【方法・研究倫理】国立がん研究センターにおける食道扁平上皮癌根治術を受けた 1188 例を対象とした。本論文で用いられているハザード関数とは、時点 t における死亡のリスクや危険度を表すものであり、全体に対する累積発生割合を見ている従来のカプランマイヤー法とは異なる解析の手法である。
【学術的意義】TNM 第 8 版において新たに規定された術前治療後の症例に対する ypStage 毎にハザードファンクション法で解析すると、再発リスクである HR のピーク値は StageI/II/III/IV=0.005/0.012/0.029/0.061 であり、ピーク時間は StageI/II/III/IV=16.1/14.8/11.1/9.3 ヶ月となり、Stage が進行するにつれ、再発リスクのピーク値は上昇し、ピーク値までの時間は短い、すなわち Stage が進行するとより早期に再発するという結果が得られた。
【考察・今後の発展】本結果を受け、術後のフォローアップ間隔に関して Stage 別に考慮しても良いことが示唆された。StageI では早期からの Intensive surveillance は不要であり、StageIII では 3 年目までの Intenseive surveillance が望ましいことを初めてエビデンスに基づいて提唱した、フォローアップに一石を投じる論文である。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。